

社会奉仕功勞

くにたちこくさいこうりゅうかい

国立国際交流会 (代表: 木下 五月 氏)

きのした さつき



長年に亘り、外国籍の方向けの文化交流を行っている団体。外国籍の方と地域の住民が共に暮らしやすい社会の実現を目的に、バスツアーや着物の着付け体験といった日本の文化を体験する企画を積極的に開催することで、地域の福祉向上に貢献している。

「国立国際交流会」の活動の起源について教えてください。

（木下代表）元々は「くにたち地域国際交流会」という大きな国際交流活動団体の「文化交流部門」として立ち上がりました。その後団体の活動規模が大幅に膨れ上がったことから、活動の効率化のため部門ごとに独立、「文化交流部門」の単独活動団体として平成12年に発足されたのが「国立国際交流会」となります。

会の構成人数はどのくらいですか。

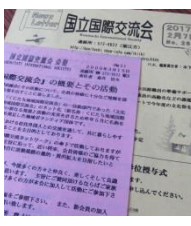
現在は50名程度が会員として所属しています。多くの会員が、「くにたち地域国際交流会」の頃から所属していた方となります。

会の具体的な活動内容について教えてください。

「くにたち地域国際交流会」の「文化交流部門」として活動していた時から変わらず、主に日本の文化を通じた交流を企画・実行しています。定期的に開催しているものは、餅つき大会やお花見などの日本の季節行事の体験企画、着物の着付け体験会など日本の伝統の体験企画、日本の風景や文化に触れるバスツアー企画などがあります。着物の着付け体験会は特に人気の高い企画で、着付けの手伝いから着物姿の写真撮影までを一貫して行っています。バスツアーも、昨年は静岡の三島スカイウォークから三島大社、小田原城というルートを訪れましたが、スタッフ15名と外国籍の方30名が参加し、とても賑わいました。

また、かつては会員によるホストファミリーの受け入れも行っていました。

会の企画等については、会報「News Letter」に記載して公表しています。



▲会報「News Letter」第1号（左手前：平成12年3月発行）と最新号の第265号（右奥：平成29年2月発行）

主な参加者は一橋大学の留学生ですが、隣に在住する外国籍の方たちにも参加してもらっています。また、首都大学や杏林大学の講師の方から、自分の生徒を参加させたいというオファーをいただき、招いたこともあります。

木下代表が国際交流活動をはじめられたきっかけは何でしょうか。

友人の誘いで「くにたち地域国際交流会」の企画に参加したことがきっかけです。外国籍の方に日本語を教える企画だったので、外国籍の方が日本語を学ぶための特殊な文法などが存在することにカルチャーショックを受けました。その後、「ボランティアのための日本語教授法」というカルチャースクールに通い、学んだ内容を活動で実践していくうちに、同団体の他の部門にも興味を持ち、最終的に文化交流部門に落ち着きました。

外国籍の方が日本の文化に触れた瞬間の面白い話があれば教えてください。

着物の着付け企画では、着付けがこまごまの間のかかるものだと「う」とを知らない方が多いです。中には長襦袢（着物の下着）まで着て疲れてしまったり、満足される方もいました。そもそも餅つき大会では、要領がわかりにくかったのか、臼が壊れるほどの勢いで餅を突く方がいました。慌てて「もっと弱く！」と言ったことがあります。

会としての今後の課題はありますか。

若い会員を増やすことが課題です。会員と参加者の年齢差が、当初は親と子くらいだったのが、今では祖父母と孫くらい離れてしまっています。このような高齢化の課題は当会に限られたことではないと思っています。今後も国際交流活動を継続していくためにも、類似団体間で横断的に連携をとりながら若返りを図り、次の世代へつなげていく努力をしていきたいです。

活動を通じて嬉しかった事はありますか。

私がホストファミリーとして受け入れていた留学生が、卒業論文の冒頭に「私が日本で活動できたのは、お母さん（木下代表）のおかげです」と書いていたことを知ったときは、本当に嬉しかったです。震災のときも様々な国から励ましの言葉をいただきました。活動を通して生まれた国際的な絆は、私たちの宝物です。

※本記事は、平成29年3月2日に取材した内容を掲載しています。